

# mini corum

## 美しき防御

ケヤキ、ハナイカダ、サンショウ、トネリコ、オオモミジ、シウリザクラ

盛岡森林管理署

森林技術指導官 松尾 亨

新葉の季節が春もみじと言われる由縁は、樹種ごとに違う色の微妙な変化にあり、特徴を覚えると遠目にも見分けられ森林調査には最適の時期です。今回は春もみじの葉の展開について紹介します。

ケヤキは、赤みのある<sup>えんじ</sup>臙脂から<sup>もえぎ</sup>萌葱に変化します。写真は開葉と同時に花芽が出てきた状態です。ハナイカダやサンショウは、ともに萌葱と臙脂のコントラストで艶のある葉が光の具合で変化します。ハナイカダは葉の中央に花芽も見え、サンショウもこのくらいの新葉が和え物や天ぷらで食べ頃ですね。トネリコは田んぼの縁や湿地で見かけ、方言で「もえぶと（萌太）」とよばれ芽生えが大きく太いことを表しています。白い産毛に包まれたウグイス色で先端が臙脂になります。オオモミジは開葉直後は臙脂で次第に浅黄と変化していきます。艶のある葉が

赤ちゃんの「紅葉手」に見えます。シウリザクラは赤く萌え出ることから森のなかでひととき目立ちます。サクラ属の中では開花時期が遅く6月初旬に穂状の白い花を付けます。

なぜ春もみじ現象が起きるか科学的に証明されていないようですが、有力な説として①紫外線が強い時期なので新葉が焼けないようUV対策②遅霜などへの寒さ対策③柔らかい葉が虫に食べられやすい初期に葉緑素作りにエネルギー投資しない省エネ対策などが考えられます。共通しているのは赤い色素で、アントシアニンの働きによるもので、植物にとって新葉の時期を乗り切る防御策と考えられます。春もみじのように「美しい防御と展開で」で新年度もスタートしたいものですね。



ケヤキ



ハナイカダ



サンショウ



トネリコ



オオモミジ



シウリザクラ